



Title	1980年代以降の花結びの価値創造 : 橋田正園および 田中年子の活動軌跡を中心に
Author(s)	矢島, 由佳
Citation	デザイン理論. 2026, 88, p. 53-67
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/106187
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

1980 年代以降の花結びの価値創造

橋田正園および田中年子の活動軌跡を中心に

矢 島 由 佳

キーワード

花結び, 茶道, 手芸, 女性の趣味, 文化的価値化
Hanamusubi, Handicraft, The way of Tea, Female Hobby,
Cultural Valorization

はじめに

1. 橋田正園による花結びの復元とその展開
2. 田中年子による花結びの共有とその展開
3. 茶道研究者による花結びの価値の創出

おわりに

はじめに

装飾的紐結び「花結び」は、花や動物などの形に結ばれた紐結びとして、日本では近世以来、衣服や調度品の装飾、あるいは女性の手遊びなど、多様な場面で用いられ、生活文化の一部となってきた¹。また、包結研究家の額田巖（1911-1993）が、花結びを茶道や香道で用いる仕覆の結びとして紹介してきた²。加えて、花結び愛好家を主な会員とした「日本結び文化学会」は、ホームページにて花結びを次のように紹介している。

花結び

古代人は結びで所有権の表示や目印・合図として使っていました。

王朝貴族達は、硯箱や鏡などの調度品にはすべて美しい房と花結びで彩られました。

貴族の女性達の一般教養として、和歌、文章、習字、絵画、音楽と並ぶ必須のものでした。

武家社会になると鎧や兜に総角結びや大総角が結ばれました。さらに、能や狂言、いけばな、香、茶の湯の隆盛と相互して実用と装飾を兼ねた多種多様な結びが考案されました。

一本の紐が作りあげる四季折々の花結びには、こうした日本の伝統が息づいています³。

以上にみるように様々に花結びは解釈されてきたが、花結びがどのような文化的意味を担

本稿は、第 67 回意匠学会大会（2025 年 8 月 26 日、京都女子大学）での発表にもとづく。

い、受容されてきたのかについては、美術史家等によって十分に研究されてきたとは言い難い。その背景には、日本では、装飾的紐結び「花結び」が、手芸と工芸の両要素を併せもつものでありながら、主に女性によって伝承されてきた「手芸」として一段低く見做され、近代以降、欧米を中心に形成された芸術研究の枠組みの外に置かれてきたと考える⁴。

こうした研究上の空白を踏まえ、本稿は、花結びを華やかな情感を想起させる紐を用いた装飾的結びと定義した上で、花結びが一定の文化的文脈の中で参照可能な事例に着目し、その意味づけのあり方を検討する。具体的には、花結びの多様な用例の中で、本稿は茶道文化に着目する。その理由は、茶道文化が、家元制度のもと伝承される文化である一方で、戦後には、家元制度に取り込まれない周縁文化をも包摂してきた性格も有し、花結びも茶道文化に取り込まれ、伝承されてきた側面を有するためである。この点についての概観として、茶道において、江戸時代の写本として伝わる『南方録』（成立年未詳）や『古流結法図』（宝暦11；1761）および『三斎公御茶書』（天保6；1835）にみるように、仕覆や茶入れに結ばれた「結び図」として花結びは伝承され、それらは、茶の師匠あるいは家元から弟子にのみ伝えられるべき秘儀として伝授されてきた⁵。一方、管見の限り、今日茶道の主流派である三千家において茶壺や仕覆に中身を封じることが主な目的とする紐結び「封じ結び」は用いられているが、花や動物の形を紐で表現する「花結び」は点前の中で実践されていない。

以上を踏まえた本稿では、花結びの言説およびその文化的価値が複合的に構築されてきた様相を明らかにすることを試みる。茶道で用いられる結びの文化史を体系的に整理することを主題とするものではなく、花結びは、今日の茶道の主要流派の家元制度に包摂されて伝承されてこなかったものの、茶道と相まった文化として理解されるに至ったその意味づけの経緯に着眼したい。そのため江戸時代の茶書に基づく結びの復元に関する1980年代以降の新聞報道、復元された結びの展覧会、出版を通じた知識の共有等を検討する。

構成については、まず、橋田正園（1923-1991）による江戸時代の史料に基づく花結びの復元の実践に着目し、花結びの価値が史料読解と実践を往還していかに創られたのかを検討する。次に、橋田によって復元された花結びが弟子の田中年子（1941年生）によっていかに広まり、花結びと茶道を結びつけた言説が流布していったのかについて分析を行う。分析では、日本結び文化学会の会報誌およびウェブサイト、展覧会記録、新聞記事、インタビュー内容、出版物を主な考察対象とする。なお、人物名の敬称を省くことを最初に断っておく。

1. 橋田正園による花結びの復元とその展開

最初に、花結びが今日どのように親しまれているのかを概説しておく。1980年代以降、カルチャーセンター等で女性が花結びを楽しむようになり、次第に花結びは女性が行う趣味の

一領域となった。では、花結びが女性の趣味として伝承されていく過程でどのように茶道と結びつけられて受容されていったのであろうか。拙稿「1970年代後半から1980年代にみる花結びの伝承」(2025)で示したとおり、花結びと茶道が結びつけられて語られた端緒として、雄川丘甫『玉のあそび』(寛政13;1801年序, 享和2;1802年版)に記載された結び図を橋田正園が紐で結んで復元した取り組みが1980年1月7日の朝日新聞(東京版)で取り上げられ、

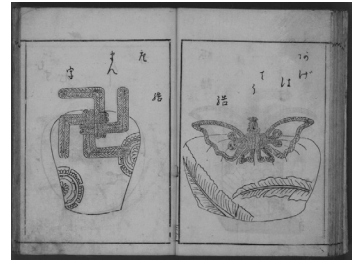


図1 雄川丘甫著, 雄川丘徳画『玉のあそび』(出版者不明, 1802) 奈良女子大学学術情報センター所蔵

花結びがその後注目されるに至った⁶。記載内容からは、『玉のあそび』(図1)には、流派の明記はないが、茶道で用いる約60種類の結びの名称と併せて、茶入袋に結ばれた結図の完成形が描かれている。だが、それは簡易的なもので詳細な結び方の説明は付されていない⁷。つまり、実際にそれらを結べるかどうか、橋田が復元するまでは不確かな結びであったといえる。

他方、上記の拙論(2025)で十分に扱えなかった論点として、橋田がいかなる経緯で『玉のあそび』に出会い、復元に至ったのかという背景が挙げられる。この点について、橋田は『やさしい飾り結び(NHK 婦人百科)』(1983)において次のように綴っている。

私が結びに関心をもちましたのは、茶道を習い始めた若いころで、金襴のお仕服に付けられた、古代紫の美しい絹ひもをみたときからです。また、これを結んで、解く、という奥ゆかしい伝統的な作法にも、強く心を打たれました。そこから、どこにいても、変わった結びに目をとめ、何か資料はないかと探すことが習慣となりました。20年前に、『玉のあそび』という、寛政年間(1789~1801年)に出版された書が手に入り、収蔵されている約60種類の結び方を解明していくうちに、1本の短いひもがこれほどに変化し、物の姿を表現できる不思議さに驚き、次第に、結ぶことに神秘的なものを感じるようになりました⁸。

つまり、復元の契機は、1983年から20年遡る1963年に橋田が『玉のあそび』に記された約60種類の結び方に出会ったことにあった。では、その経緯はいかなるものだったのか。その詳細を明らかにするため、筆者は橋田の弟子である田中に対し、2025年7月8日および7月30日にインタビューを行った⁹。そこで語られた内容は次のようにまとめられる。

・昔は今と異なり、茶道修行では師匠の指示に従うことが絶対であり、師匠から古くなった仕覆の縫い直しを命じられた橋田は、必死に自ら仕覆を解いて、縫い方を学び、新たな仕覆を仕立てる術を身につけた。

・橋田の仕覆の誂え直しは評判を呼び、橋田の師匠を通じて石州流¹⁰の他の師匠からも依頼が寄せられるようになったが、材料は支給されても労賃はなく、無償で奉仕していた。そのような折、三上梅園師匠から「自分の手元に置いていても活用されないのではこの本を役立ててほしい」と託されたのが『玉のあそび』であった。

・『玉のあそび』との出会いを契機に、橋田は茶道で用いる仕覆の飾り結びの復元に取り組むようになり、田中が茶道を学び始めたのは、橋田が結びの復元へと力点を移す移行期であった。

ここで語られた内容と前述の橋田の回想記を併せると、橋田は茶道修行の過程で、仕覆の長緒結びに関心を深め、1963年に『玉のあそび』に出会ったことで、茶道の研鑽よりも『玉のあそび』に記された結びの復元に本格的に取り組むようになったことが明らかになった。

では、復元された結びは、いかにして世に拡まったのであろうか。2025年7月8日および7月30日に田中に実施したインタビューで語られた内容および『むすび——創立二十周年記念誌——』（2012）に掲載された田中の回想によると、橋田は『玉のあそび』の復元をもとに小冊子を作成し、1965年に1000部印刷した（図2）。そのうち、石州流の家元経由で300部が売れ、残部は当時京都タワーの近くにあった丸物百貨店の茶道具売り場で販売された。この冊子を、京都に出張中の額田巖が入手し、橋田に手紙を送ったことが契機となり交流が始まった。その後、実際に額田夫妻と交流を深めたのは、田中であった。このような関係のもと、後に日本結び学会の創設が額田の提案で実現するに至った¹¹。



図2 橋田正園『長緒の飾り紐写真集』（1965）
田中年子所蔵

2. 田中年子による花結び文化の共有とその展開

額田が著作物や人的交流を通じて花結びの価値創造に寄与してきたことは明らかであるが、花結びの文化史に特化した額田による書籍は刊行されていない。そこで、出版物を通じて花結びの文化的価値がどのように構築されてきたのかをみていきたい。具体的には、橋田、田中、そして両氏のいずれかの系譜に位置付けられる著者による出版物にみる記述内容を手掛かりに、花結びに関する言説の構築過程を分析していく¹²。花結びに関する当該書籍は、1976年以降、約20冊出版されている（表1）。これらの書籍に共通して見られる特徴は、写真や図解を用いて結び方を解説することを主な目的としている点にあるが、同時に、花結びの文化的位置付けについては、茶道と関連づけて述べられることが多いという傾向が認められる。それは、敗戦による価値の揺らぎを背景として、高度経済成長期において茶道が女性を中心とした日本文化の伝承を担う場として再編されたことと関係していると推察される¹³。とりわけ1980年代は茶道を嗜む女性を対象とした、華道、着付け、料理、美術、伝統文化等、多

表1 花結びに関する書籍一覧（筆者作成）

著者、書籍タイトル、出版社(出版年)	著者、書籍タイトル、出版社(出版年)
西垣琳弘『かざり結むすび』（総合科学出版,1976）	田中年子『花結びと袋もの（NHKおしゃれ工房）』（日本放送出版協会,2004）
橋田正園『ひもの舞曲 飾り結び』（小林学院,1976）	田中年子『くらしを楽しむ四季の花結び』（淡交社,2006）
西垣琳弘『茶人のかざり結び』（総合科学出版,1979）	川島美園『図解はじめての飾り結び』（水曜社,2006）＜初版＞
『はな結び入門』（淡交社,1980）	川島美園『図解はじめての飾り結び2』（水曜社,2008）＜初版＞
橋田正園『やさしい飾り結び（NHK婦人百科）』（日本放送出版協会,1983）	『NHKまる得マガジン“ひも結び”で暮らしを彩る 講師田中年子』（日本放送出版協会,2010）
田中年子『花むすび』（京都書院,1993）	川島美園『吉祥を呼ぶ「飾り結び」：いいことが起こる「結び」のアクセサリーと小物』（PDP研究所,2011）
永井百合子『花結び：美しい紐あそび』（淡交社,1997）	田中年子『暮らしを彩る飾り結び』（日本放送出版協会,2012）
松田愛子『紐で楽しむはじめての花結び手芸』（日貿出版社,2000）＜初版＞	永井亜希乃『はじめてでも必ずできる飾り結び：15の基本結びをやさしく図解』（世界文化社,2015）
田中年子『花結びのアクセサリー（NHKおしゃれ工房）』（日本放送出版協会,2002）	永井亜希乃『増補改訂版 はじめてでも必ずできる飾り結び』（世界文化社,2025）

様な教養形成の機会が増加した時期でもあった¹⁴。そのような中、女性は茶道の点前で扱う仕覆の紐結びとして花結びにも関心を寄せるようになった可能性がある。

次に、（表1）にみる書籍内容を確認すると、香道で用いる結びについての写真入りでの記述は、『はな結び入門』（1980）¹⁵、永井百合子『花結び：美しい紐あそび』（1997）の2冊のみに認められる。一方、茶道で用いられる装飾的紐結びについて写真入りで紹介されている書籍は、計11冊あり、そのうち4冊が田中年子による書籍である。

これらの田中の書籍で花結びと茶道の関係はどのように記されているのであろうか。まず、田中年子『花むすび』（1993）には、以下のような記述が確認できる。

仕服結び

茶道は戦国武将の教養と攻略の一つになっていました。茶道役は主君の毒殺を防ぐために、茶入袋の紐結びを自分だけが知っている秘密の封じ結びにする必要がありました。たとえ結びを解いて毒を混入したとしても、もと通りに結ぶ事が出来なかったら、その目的は果たせません。つまり結びが鍵の役目をしていたからです。

世の中が平和になり、茶道が民間のものになると、封じ結びの必要性はなくなり、茶入袋の結びは装飾化され、また遊びの要素が強くなってきました¹⁶。（下線は筆者による）

加えて、田中年子『花結びと袋もの（（NHK おしゃれ工房）』（2004）には、次のような記述が見られる。

乱世のころ、時の将軍は常に反対勢力から生命を脅かされ、飲食物に一服盛られるなどの事態もたびたびあったのでしょう。お茶も飲み物ですから、茶道役は異物の混入を防ぐために、自分だけが知る秘密の封じ結びを編み出しました。たとえ、異物を入れようと結び目をほどこいても、元どおりに結ばないとその目的は達成できません。つまり、結

びが鍵の役目を果たしていたのです。習得も伝授することもできない幻の結びといわれましたが、世の中が平和になり、茶の湯が一般に普及すると、封じ結びの役割は終わりました。仕服（茶入れ袋）の結びは実用性や秘伝性が薄れ、少しずつ装飾化されて遊びの要素が強くなっていきました¹⁷。（下線は筆者による）

このような封じ結びが茶道において用いられ、毒殺を防ぐことを目的として「鍵」の役割を果たしてきたとする記述は、上記2冊に加えて『花結びのアクセサリー（NHKおしゃれ工房）』（2002）、『くらしを楽しむ四季の花結び』（2005）にも程度の差はあれど、確認できる。説明の典拠については、橋田から聞き覚えたものであることが、2025年8月29日付インタビューから判明している。それは、橋田正園『やさしい飾り結び（NHK婦人百科）』（1983）にみる次の記述内容の類に即したものだと考えられる。

茶道が盛んであった戦国乱世になると、権力者の飲み物、食べ物に一服盛り、権力者を暗殺する事件が発生しました。そのため、高い身分の人に仕える茶道役は、自分がしたくした茶入れに毒物が投入されては一大事と、茶入れを袋に入れ、^{なが}長緒をかけて、「封印結」をし、主君を災いから守護する心遣いをしていました。封印結びは茶道役一人の心覚えとし、その技法はだれにも伝えられませんでした。「小壺袋に入れ、封付事あり御成の時、茶道役の仕る事也」と茶道秘伝書（『和泉草』1687年）に記載されています¹⁸。

ここで橋田は、『和泉草』（貞享4；1687）を典拠に茶道役が毒殺防止のために封じ結びを茶入れの入った袋に施していたと断定している。だが、この見解については、慎重を要する。同書に記されているのは、茶入れ袋の開封を防ぐための封印、すなわち鍵の役割を果たすものとして結びが用いられていたという点にとどまり、毒殺防止を目的としていたとは明記されていない¹⁹。したがって、封じ結びの目的を毒殺防止とする解釈には一定の蓋然性が認められるものの、それを事実とみなすことは拡大解釈に当たる可能性があると言及できる。

以上により、橋田および田中が刊行した花結びに関する書籍が提示してきた歴史像は、実証的根拠と解釈的物語が混在しながら構築されたものでもあったといえよう。

次に、花結びが裏千家を通じて茶道を嗜む人たちに受容されていった側面を裏千家宗家直轄会員組織「淡交会」の機関誌に着眼の上、考察していく。機関誌は、修道期間3年以上の上級者である淡交会会員に向けたもので²⁰、『淡交タイムス（1～5月、7月～11月）』と『裏千家グラフ（6・12月）』で構成される²¹。このうち、『裏千家グラフ』で、2013年6月号以降、各号ごとに一つの「花結び」または「仕覆の結び」が取り上げられ、2025年12月号まで、計

25 回の掲載が確認できる（表 2）。

表 2 「花結び」および「仕覆の結び」に関する『裏千家グラフィ』掲載内容一覧（筆者作成）

番号	年月日	掲載頁	種類	番号	年月日	掲載頁	種類
1	2013年6月	巻頭表紙裏 1頁	花結び [藤]	14	2019年12月	巻頭表紙裏 1頁	花結び [匂い梅]
2	2013年12月	巻頭表紙裏 1頁	花結び [梅]	15	2020年6月	巻頭表紙裏 1頁に写真、本文18頁	花結びの生き物たち [亀]
3	2014年6月	巻頭表紙裏 1頁	花結び [木樨]	16	2020年12月	巻頭表紙裏 1頁に写真、本文24頁	花結びの生き物たち [鶴]
4	2014年12月	巻頭表紙裏 1頁	花結び [蕉]	17	2021年6月	巻頭表紙裏 1頁に写真、解説17頁	花結びの生き物たち [鯉]
5	2015年6月	巻頭表紙裏 1頁	花結び [杜若]	18	2021年12月	巻頭表紙裏 1頁に写真、解説22頁	花結びの生き物たち [胡蝶]
6	2015年12月	巻頭表紙裏 1頁	花結び [菊]	19	2022年6月	巻頭表紙裏 1頁に写真、解説17頁	花結びの生き物たち [蜻蛉]
7	2016年6月	巻頭表紙裏 1頁	花結び [桃]	20	2022年12月	巻頭表紙裏 1頁に写真、解説17頁	花結びの生き物たち [鬼]
8	2016年12月	掲載なし		21	2023年6月	巻頭表紙裏 1頁に写真、解説7頁	仕覆の結び [草の封じ結び]
9	2017年6月	巻頭表紙裏 1頁	花結び [桔梗]	22	2023年12月	巻頭表紙裏 1頁に写真、解説17頁	仕覆の結び [横の封じ結び]
10	2017年12月	巻頭表紙裏 1頁	花結び [橘]	23	2024年6月	巻頭表紙裏 1頁に写真、解説7頁	仕覆の結び [縦の封じ結び]
11	2018年6月	巻頭表紙裏 1頁	花結び [瓢箪]	24	2024年12月	巻頭表紙裏 1頁に写真、解説7頁	仕覆の結び [真の封じ結び]
12	2018年12月	巻頭表紙裏 1頁	花結び [楓]	25	2025年6月	巻頭表紙裏 1頁に写真、解説7頁	仕覆の結び [藤]
13	2019年6月	巻頭表紙裏 1頁	花結び [柏]	26	2025年12月	巻頭表紙裏 1頁に写真、解説19頁	仕覆の結び [梅]

掲載内容の変遷をみると、2013 年 6 月から 2019 年 12 月までは、巻頭表紙裏に植物意匠の説明と仕覆の結びの写真、結び方の簡易な説明文が掲載されていた。結びの図解が付されるようになったのは、2020 年 6 月号であり、それ以降、動物意匠の結びや「封じ結び」が新たに取り上げられるようになった。さらに 2025 年 6 月号では、初回 2013 年 6 月に掲載された「花結び [藤]」が「仕覆の結び [藤]」として図解が付されて改めて掲載されている（図 3）。同様に、2025 年 12 月号にも 2013 年 12 月号に掲載された「花結び [梅]」が「仕覆の結び [梅]」として図解が付されて改めて掲載されている。

これら一連の『裏千家グラフィ』への掲載記事には、協力者として「田中年子」と記されている。掲載内容に同氏がどのように関わってきたのかという点については、2025 年 7 月 30 日および 8 月 29 日に田中にインタビューを実施した。その結果、「連載が始まった経緯については失念している。掲載前の取材については、事前に結び図および京都書院から出版した『花むすび』（1993）に掲載のポジフィルムを提供している。田中の監修のもと、結びの特徴



図 3 「仕覆の結び [藤]」（右から表紙、表紙裏、解説）『裏千家グラフィ』2025 年 6 月号

や手順を紹介する記事が機関誌担当者により作成されている」ということが判明した。

以上を踏まえると、花結びは裏千家の機関誌を通じて受容され、茶道の文脈に花結びを位置付けながら文化的価値が形成されてきた側面があることが示されたといえよう²²。

3. 茶道研究者による花結びの価値の創出

花結びの価値は、「日本結び文化の会」および「日本結び文化学会」に関わってきた茶道研究者らによっても形成されてきた²³。茶道と花結びとの関係は、1996年5月に「日本結び文化の会」初代会長の井筒雅風（1917-1996）が逝去したことを受け、1997年に著名な茶道研究者である熊倉功夫（1943生）が会長職を引き継いだことにより、深まっていった側面があると考えられる²⁴。同氏の会長就任の縁を取りもったのは、2000年に同会副会長に就任した茶道および華道に詳しい武内範男（1947年生）であった²⁵。武内と花結びとの関わりは、1981年3月14日から4月14日にかけて思文閣美術館で開催された「ひもが織りなす伝統の美 飾り結び展」を学芸員として企画したことに遡る（図4）²⁶。展覧会の開催経緯については、1980年1月5日（大阪版）の朝日新聞に掲載された、橋田正園による『玉のあそび』にみる結びの復元に関する記事を見た武内が、橋田に連絡し、展覧会が実現に至ったと武内は回想する²⁷。同展は、極秘として伝えられてきた茶道で用いる飾り結びを橋田が江戸時代の資料から復元し、美術館で初めて展示したものである²⁸。

展示内容については、1981年3月24日付の朝日新聞（京都）が、伊勢貞丈（1718-1784）が記した『包結記』のうち「結記」（成立年未詳）および雄川丘甫（生没年未詳）が記した『玉のあそび』から橋田が復元した約100種類の結びが展示されたことを報じている。その内訳は、茶人の用いる仕覆結びのほか、刀の下げ緒、祭具や調度品の結びなどであった²⁹。さらに、1981年3月30日付の京都新聞は、南方宗啓の著した茶書、『南方録』の奥義にみる三種極真点前「西湖家八重羽結び」を橋田が長年の研究の末に復元に成功したことを主題として取り上げ、「永い間、幻の結びとして解明されなかった西湖家八重羽結び」として写真入り記事を掲載した。その内容を要約すると、「多くの茶人が西湖家八重羽結びの解明に敗れてきたが、橋田は、4、5年かけてその解明に成功した」というものである。この結びは弟子の田中にも伝えられている（図5）。また、以上2紙の新聞記事



図4 思文閣美術館展覧会案内
葉書、上段：裏面、下段：
表面（株式会社思文閣提供）



図5 田中年子による「西湖家
八重羽結び」（2025年7
月30日付筆者撮影、参考
資料）

に記載はないが、その展示には、田中による壁掛けの作品も含まれていたことが、筆者が2025年8月29日に田中に対して実施したインタビューで判明した。

その後、武内が畠山記念館（現：荏原畠山美術館）の学芸員に着任すると、花結びに関する展示が再び企画された。1999年1月8日から3月7日にかけて同館の冬季展「寒のころ——茶道具取り合わせ——」が開催され、その併設展示として「茶の湯の飾り結び」が展示された。同展では、茶人の用いる仕覆の飾り結びや西湖家八重羽結びに加え、訶梨勒（かりろく 図6）や茱萸袋（ぐみぶくろ 図7）といった年中行事に関わる結びも展示された³⁰。また、展示目録の裏面に掲載された紹介文には、茶人が用いる結びについて次のように紹介されている。

…武家社会では鎧、兜、刀剣など武具を飾る結びが発達しました。室町時代には能装束や能面の紐、香道、花道などの流行に伴って、様々な紐の結びが創られました。続く戦国時代になると、武将の茶道役は茶入れや釜に毒物をもられぬよう「封印結び」が考案され、主君を守るよう努めました。封印結びは己一人だけの心覚えとし、その技法は口伝さえされませんでした。

平和な江戸時代に入ると、結びは黄金期をむかえ、水引の結びや手拭いの結びなど多種多様な結びが生まれました。茶道における結びにも遊びの要素が強くなり、仕覆の結びを中心に梅や菊、とんぼなど色々な形を表現するものになりました³¹。

つまり、展示目録裏面に掲載された紹介文には、前述した茶道における封じ結びが毒物混入を防ぐための「鍵」として機能したという内容が記されており、当該言説が鑑賞者に共有されていたことがわかる。別の言い方をすると、畠山記念館という茶の湯に特化した美術館での展示を通じて、「茶道で用いる結びが毒殺防止のための封印として用いられてきた」という言説が広まった側面があると指摘できる。

また、2004年12月4日から12月5日にかけて再び畠山記念館にて「田中年子花結び展」が開催された。同展は、田中が日本放送出版協会より『花結びと袋物（NHK おしゃれ工房）』（2004）を刊行したことを契機に花結びについての理解を人々に深めてもらうことを目的に開催されたものであった。展示では、華道家でもある武内が生けた花と田中による花結びを



図6 田中年子による訶梨勒（2025年7月30日付筆者撮影、参考資料）



図7 田中年子による茱萸袋（2025年7月30日付筆者撮影、参考資料）

併せて玄関、廊下、茶室において鑑賞することができた³²。

以上の検討から、武内が学芸員として江戸時代の伝書をもとに復元された茶道で用いる飾り結びを美術館で継続的に展示してきたことは、結びに歴史的価値を付与し、さらに毒物混入を防ぐための「鍵」として機能したという言説を権威づけ、同言説が茶道愛好家等に広まる契機となった。また、新聞報道を通じて、同言説が流布したことが明らかになった。

続いて、日本結び文化学会における活動を通じて熊倉が茶道と花結びとの結びつきをいかに深化させていったのかをみていく。熊倉の「日本結び文化の会」会長就任は1997年に田中からの依頼を受けたもので、就任後2001年に同会は「日本結び文化学会」に名称変更している³³。会長就任の背景には田中と熊倉の長年の交流があったことがある³⁴。田中は『むすび——創立二十周年記念誌——』（2012）で熊倉との出会いの経緯を次のように綴っている。

昭和五十五年、朝日新聞で先生と私の事が紹介されました。その年の八月にはNHK婦人百科に出演、放映の翌日には東京にある主婦の友社手芸センターから教えに来て下さいとの連絡が入り、続いて関西方面でもNHK文化センター、朝日カルチャーセンターから講習の依頼が続きました。翌五十六年には思文閣美術館から展示の依頼があり、その時の担当学芸員が武内範男氏（副会長）です。不思議なご縁です。武内氏から茶の湯研究会への入会をすすめられ、勉強会に参加させていただくことになりました。その会のリーダーが、筒井紘一先生（裏千家）、熊倉功夫先生（会長）、名和修先生（陽明文庫）と、本当にいい出会いをさせていただきました³⁵。

このように、武内との出会いを契機に、田中は著名な茶道研究者と知遇を得るに至ったのである。また、熊倉は、会長就任後に初めて発行された1997年2月20日付の会報誌において、茶器の仕覆や壺飾りの結び、さらに『南方録』に記されている「八重羽式の結び」（図8参照）に言及したほか、彦根城博物館所蔵の井伊直弼ゆかりの茶壺の口覆い紐結びなどを紹介している。同誌においては、茶の湯が結びと関係が深いことが示されるとともに、結びの文化を茶の湯にとどめず、儀礼文化としての結びなど、より広い視野から捉えていきたい、という就任の抱負を述べている³⁶。また、翌1998年4月28日開催の総会は、彦根城博物館で開催され、会員は、井伊直弼に関連した前述の茶壺の口覆いの紐結びや武具の結びの実見の機会を得ている³⁷。このような活動からも、会員は、花結びをより一層茶道と結びつけて理解する契機を得たと考えられる。

他方で、熊倉は花結びと茶道の関係性について対外的に発信も行った。1999年9月22日から9月25日にかけて国立歴史博物館（台北）で開催された「第8回東亜三国結芸展」は、

会長就任後初の国際展である。同展図録に「ご挨拶」として、当時国立民族学博物館教授でもあった熊倉は次のような日本語の文章を寄せ、その挨拶文は中国語訳と併記されている。

…東洋では、ことに結びの美を追求した、見事な飾りの文化が発達しています。宗教的な飾り、祭礼の飾り、あるいは装身具や生活のなかの結び飾りが生まれました。ことに日本では、茶道と結びついた飾りの結びが数多くあります。

喫茶の習慣はアジアにはじまり、東洋の生活文化に欠かせぬ清雅の文化であることはいうまでもありません。日本では13世紀に中国宋代の茶の製法、用法が伝わって、やがて茶道という独特の文化を形成しました。茶道のための独特の建物、庭、道具、作法などが考案され、日本文化の中心の一つとなったのです。茶道では用いる茶碗や茶入などを美しい袋に入れ、その口を締めるときに、いろいろな紐の結び方を使います。解きやすく結びやすいという実用性と、客の目の前に置かれたとき、袋と紐とのバランスのなかに美しさをみせるという藝術性とを兼ねた結びの文化です³⁸。…（下線は筆者による）

ここでは、日本において茶道と結びの結びつきが深いと述べている。事実、今日も茶壺飾や仕覆に結ぶ長緒結びは用いられているが、現在の主流な茶道の流派では花結びは点前で用いられていない。なお、同図録には、出展作品として田中年子による茶道で用いる仕覆の飾り結びの作品が収められているが、他の日本人参加者による茶道に関連した作品は含まれていない³⁹。これは、開催前日1999年9月21日に台湾中部で発生した「921大地震」により、日本から台湾行きの航空便が運休となったためである⁴⁰。その結果、事前に訪台していた栗田副会長による縄結び作品のみが展示され、他の日本人参加者は訪台を断念し、図録掲載作品の実物展示は実現しなかった⁴¹。したがって、作品展示ではなく、国立歴史博物館が刊行した図録にみる熊倉の挨拶文を通じて、台湾において茶道で用いる飾り結びが日本の結び文化の中で重要であることが発信されたと解釈し得る。

おわりに

本稿は、1960年代後半以降に再興された装飾的紐結び「花結び」が、手芸的創作や装飾的技法としてではなく、いかなる経緯で茶道の文脈に取り込まれながら、その文化的価値が形成されていったのかを、主に橋田正園および田中年子の活動軌跡追って検討した。その結果、橋田による江戸時代の茶書に記された記述に基づいた結びの復元が、史料解釈と実践を往還するなかで成立した創造的行為であり、過去の技法をそのまま再現するものではなかったことが明らかとなった。また、その成果は、新聞報道、美術館展示、出版などを通じて社会的

に可視化され、田中によるカルチャーセンターでの花結びの教授、出版活動、美術館での作品展示、日本結び文化学会での活動を通じて共有された。その結果、花結びは茶道文化史の文脈において参照可能な存在として位置付けられていった。その過程で、橋田による茶道の仕覆に用いる結びの解釈、すなわち「茶道では結びが毒殺を防ぐことを目的として用いられていた」という理解は、史料の限定的記述に基づきつつも、出版物や展示等を通じて反復的に提示されることで、言説として構築され、流通してきたことが示された。

さらに、2013年以降の『裏千家グラフ』における「花結び」および「仕覆の結び」に関する連載は、花結びが家元制度や免許制度に正式に組み込まれたことを意味するものではないものの、茶道文化を更新し続ける裏千家の媒体において継続的に参照されているという点で重要である。この事実は、花結びが茶道文化に包摂され得る価値を有するものとして認識され、その価値が現在進行形で裏千家に緩やかに受容されている状況を示すものといえよう。加えて、本論では、熊倉功夫による論考を参照し、花結びが茶道と結びついて理解できることが茶道研究者により言説化されてきた側面があることも指摘した。

以上を踏まえると、1980年代以降、主に女性に愛好されてきた花結びは、手芸の一分野として継承されると同時に、茶道具に付随する造形美の一形態として評価されるという二重の位置づけを獲得してきたと結論づけられる。

【謝辞】 田中年子様、武内範男様には、インタビューへのご協力および資料提供を賜り、株式会社思文閣様、荏原畠山美術館様、一般社団法人茶道裏千家淡交会総本部様より資料提供を賜りました。また、本研究は「鹿島美術財団 美術振興事業 美術に関する調査研究助成」を受けました。ここに記して心より感謝申し上げます。

註

- 1 『日本国語大辞典 第二版 第十巻』小学館（2001），p.1312.
- 2 額田巖「古典文学と花結び」『はな結び入門』淡交社（1980），pp.29-30（pp.29-33）. 額田巖『結び（ものと人間の文化史 6）』，pp.98-99.
- 3 日本結び文化学会ホームページ <https://www.traditional-japanese-knots.com> 2025年11月18日閲覧。なお、同会は2023年6月に閉会している。
- 4 稲賀繁美『日本の近代思想をよみなおす 3 美／藝術』東京大学出版（2024），p.23. 菊池裕子「「工芸」から「この国」の「日本美術史」を脱帝国化する：ジェンダー、伝統、サステナビリティ」小田原のどか編、山本浩貴編『この国（近代日本）の芸術——〈日本美術史〉を脱帝国主義化する』月曜社（2023），pp.114-115，pp.128-129（pp.101-132）. Lippard, Lucy R. “Making Something from Nothing (Toward a Definition of Women’s ‘Hobby Art’).” 1978, in *The Pink Glass Swan: Selected Essays on Feminist Art*, ed. Lucy R. Lippard, (New York: New Press, 1995), 128-138.

- 5 矢島由佳「江戸時代にみる花結びの伝承——ジェンダーの視点から——」『デザイン理論83号』, 意匠学会(2024), p.57. 戸田勝久『南方録の展開：千利休秘伝書』平凡社(1988) pp.96–99.
- 6 矢島由佳前掲論文, 意匠学会(2025), p.46. 朝日新聞(東京版, 1980年1月7日, 朝刊13頁).
- 7 雄川丘甫『玉のあそび』(享和2; 1802) 奈良女子大学学術情報センター蔵, <https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100239156/viewer/17> 2025年8月23日閲覧。『玉のあそび』には茶道で用いる仕覆に結ぶ結びが掲載されているが、ここでいう茶道とは、抹茶を用いた茶道に限らず、煎茶を用いた茶道を含むものだとして筆者は考える。その理由として、江戸後期には文人の間で煎茶道が流行していたことに加えて、掲載されている茶器の形状が六角形や菱形であり、それは煎茶で用いる錫製の茶心壺の形状だと捉えることができるためである(Graham, Patricia J., “Karamono for Sencha: Transformations in the Taste for Chinese Art,” in *Japanese Tea Culture: Art, History, and Practice*, ed. Morgan Pitelka (London and New York: Routledge, 2007), 111).
- 8 橋田正園『やさしい飾り結び(NHK婦人百科)』NHK出版(1983), p.3(まえがき).
- 9 インタビューは、計3回実施した。後述の展覧会での展示については、2025年8月29日にインタビューを行った。
- 10 石州流は、江戸時代に全国の大名家茶道職に拓がった片桐石州(1605–1673)を祖とする武家茶道として知られる(熊倉功夫『片桐石州の茶の湯』『武家の正統片桐石州の茶』根津美術館(2025), pp.6–13)。
- 11 日本結び文化学会『むすび——創立二十周年記念誌——』日本結び文化学会(2012), p.3.
- 12 橋田または田中に学んだことのある人物が記した書籍には、出版時点で既に師から離れて出版された書籍も含んでいる。師弟関係について2025年8月29日付で筆者が田中に実施したインタビュー内容に即して述べると、西垣および川島は橋田に、松田は田中に、永井百合子は田中に短期間学んでいる。なお、永井亜希乃は、田中に直接学んでいないが、永井百合子のご息女である。
- 13 加藤恵津子『「お茶」はなぜ女ののものになったか：茶道から見る戦後の家族』紀伊國屋書店(2004), pp.85–87.
- 14 Mori, Barbara Lynne Rowland. “The Tea Ceremony: A Transformed Japanese Ritual.” *Gender and Society*, vol. 5, no. 1, (1991): 88–89 (86–97).
- 15 『はな結び入門』淡交社(1980)は編著であり、額田巖「古典文学と花結び」にて香道で用いる志野袋が紹介されているが、橋田に師事した西垣琳弘が著した『「飾り緒結び」の結び方』には香道で用いる結びは含まれていない。
- 16 田中年子『花むすび』京都書院(1993), p.85.
- 17 田中年子『花結びと袋もの(NHKおしゃれ工房)』日本放送出版協会(2004), p.3.
- 18 『やさしい飾り結び(NHK婦人百科)』日本放送出版協会(1983), p.157. ここでいう茶道役とは、茶事をつかさどる役のことである。亭主に代わり、茶会の雰囲気盛り上げることや茶会の進行や運営に携わっていた(「茶頭」『角川茶道大事典 普通版』角川書店(2002), pp.556–567).
- 19 『雅遊漫録 六』(成立年未詳, 1763刊行)には、花結びが簡単に解けないため、鍵のような役割を担ったことが記されている。さらに『和泉草』(1687)には將軍に仕えた茶道役が、茶入を袋に入れ、その上に封じ結びをしたことが記されている(矢島由佳「江戸時代にみる花結びの伝承——ジェンダーの視点から——」『デザイン理論83号』, 意匠学会(2024), p.58 (pp.49–63))。
- 20 淡交会の会員になるためには、推薦を伴わない場合、正会員として入会し、修道期間3年程度が目安で取得できる上級の資格証である「行之行台子」以上の許状を有する必要がある(一般財団法人今日庵「許状・資格について」, <https://www.urasenke.or.jp/textb/shiru/culic/>, 一般社団法

- 人茶道裏千家淡交会 <https://www.urasenke.or.jp/textc/tan/> 2025年9月22日閲覧)。
- 21 一般社団法人茶道裏千家淡交会 <https://www.urasenke.or.jp/textc/tan/> 2025年9月22日閲覧。
- 22 『裏千家グラフ』で花結びの連載が始まった経緯および連載の選定方針について2025年10月3日付で淡交会ホームページの問い合わせフォームから照会したが、明確な回答は得られていない。
- 23 「日本結び文化の会」は、額田巖および栗田文子を中心に東京で1987年に結成され、韓国および台湾との交流を推進した。組織的な活動が本格化したのは、2001年に井筒雅風を会長に、額田巖を副会長として5月に「日本結び文化の会」が改めて京都で発足して以降であった。その後、「日本結び文化学会」と名称を改め、2023年6月に閉会した。活動の中心を担ったのは、田中年子および西村望代子であった。1993年1月以降、会報誌『むすび』を年に2回発行し、結び文化に関する多様な資料や論考、会員の作品を展示する展示会の開催、その報告等が掲載された。会員数の正確な推移は記録されていないが、2012年の時点で250名を超え、その9割は女性であった(日本結び文化学会前掲書(2012) p.2, 5, 13, 『国際結び文化東京展』日本結び文化の会(1987))。
- 24 日本結び文化学会前掲書(2012), pp.36–37.
- 25 日本結び文化学会前掲書(2012), p.3, p.66. 武内範男は、思文閣出版・思文閣美術館を経て、畠山記念館主任学芸員を務め、茶道史および華道史を中心に研究を行ってきた(日本結び文化学会前掲書, p.44)。
- 26 柴八千穂編『思文閣美術館36年の軌跡』柴八千穂(2017), p.11. 2025年7月1日付で武内範男の高知県のご自宅にて筆者が武内範男に実施したインタビュー内容に基づく。
- 27 2025年7月1日に高知県のご自宅にて筆者が武内範男に実施したインタビュー内容に基づく。朝日新聞(大阪版, 1980年1月5日, 13頁)。
- 28 柴八千穂編前掲書, p.80. 日本結び文化学会前掲書(2012), p.3.
- 29 朝日新聞(第二京都版, 1981年3月24日, 20頁)。
- 30 財団法人畠山記念館 平成11年 冬季展「寒のころ ― 茶道具取り合わせ ― 併設展示 茶の湯の飾り結び」展示目録(財団法人畠山記念館, 1999)。
- 31 財団法人畠山記念館前掲展示目録。
- 32 日本結び文化学会前掲書(2012), p.104.
- 33 名称変更の意図について、熊倉は、趣味の集まりであるだけでなく、結び文化の学術研究を基盤とした「学びの会」も目指し、会の活性化を図る意向を示した(日本結び文化学会前掲書(2012), p.69)。
- 34 日本結び文化学会前掲書(2012), p.69.
- 35 日本結び文化学会前掲書(2012), p.3.
- 36 日本結び文化学会前掲書(2012), p.37.
- 37 日本結び文化学会前掲書(2012), p.50.
- 38 国立歴史博物館編輯委員会『装飾結的創作：第八屆東亞三國結藝聯展 / The Art of Decorative Knots : The 8th International Exhibition of Traditional Knots』国立歴史博物館(1999), p.8. 挨拶文は台湾で入力された際に句読点等の明らかな入力間違いがあったと考えられたため、筆者が、句読点を改めた。また、誤字脱字の訂正として、「あ有る」を「ある」に改めた。
- 39 国立歴史博物館編輯委員会前掲書, p.85.
- 40 日本結び文化学会前掲書(2012), p.66.
- 41 日本結び文化学会前掲書(2012), p.64. 国立歴史博物館編輯委員会前掲書, p.74.

Cultural Valorization of Hanamusubi since the 1980s: Institutionalising the Practice through the Work of Shōen Hashida and Toshiko Tanaka

YAJIMA, Yoshika

Hanamusubi, a form of decorative knotting that evokes floral and figurative motifs, has long existed on the margins of Japanese cultural history, positioned ambiguously between handicraft and art and transmitted largely through women's practices. This study examines how *hanamusubi* came to be recontextualized within the cultural framework of the tea ceremony from the 1980s onward, focusing on the activities of Shōen Hashida (1923–1991) and her disciple Toshiko Tanaka (b.1941). By tracing Hashida's reconstruction of Edo-period knotting techniques based on historical tea manuals and illustrated sources, the study reveals how archival interpretation and embodied practice interacted to "recreate" a past tradition. It further analyzes how Tanaka expanded and disseminated these techniques through publications, exhibitions, and adult education programs for female hobbyists. Additionally, the paper examines how tea scholars and curators, notably through museum displays and international exhibitions, conferred authority on these interpretations and integrated *hanamusubi* into broader discourses of Japanese cultural understanding.

Through an analysis of textual sources, visual materials, interviews, and institutional media, this study demonstrates that *hanamusubi* has been sustained by a dual valuation: as a form of women's handicraft and as an aesthetic cultural creation situated in the context of tea culture. The findings illuminate how cultural meaning is constructed through practice, discourse, and institutional mediation, offering insights into the gendered dynamics of cultural creation and the flexible boundaries of tradition in modern Japan.